



# 麻生不動院(明王山不動院般若坊) 室町時代にルーツを持つ古刹



麻生不動院は、下麻生1丁目にある真言宗豊山(ぶざん)派の寺院で、「明王山不動院般若坊」と呼ばれます。応永年間の1400年頃、足利公坊の庇護を受け不動堂が建立されたとされます。1849(嘉永4)年に了円という僧侶が再興に努め、王禅寺の管理下になって層繁栄し、1月28日の不動の日は、北は津久井郡城山から、南は東海道川崎宿からも参詣に来たそうです。本尊は不動明王像で、縁起によると鎌倉覚園寺を開山開基した願行上人が不動尊3体を作り、1体を自寺に、他の2体を相模の大山と武州麻生郷不動院に安置したといわれます。一方、伝説では、昔ある村人が木賊ヶ原でトクサを刈っている時八寸程の不動尊が見つかり、これが麻生不動の本尊で、以来木賊不動の名が付き、火伏せの神とされています。1月28日の縁日に参詣者は火伏せの利益があるという銭をもらって帰り、それを囲炉裏の自在鉤にかけておく子どもが炬に落ちない、火事にもならないとされています。1年間無事に過ごせたときは、前年にももらった穴あき銭にお礼のお金を添えて返し、新しい火伏せの銭をもらいます。この風俗は囲炉裏のなくなった今も続いています。

## だるま市が川崎市地域文化財に

不動の縁日、境内には「だるま」の店が、また参道には400軒を超す露店が並びます。縁日にだるまを売り始めたのは1904(明治37)年からで、町田市能ヶ谷の池田巳之吉という人が、東京北多摩郡の村山町からだるまを仕入れて売ったのが最初とされます。大正時代に入つただるまを売る店が増え、1931(昭和6)年から平塚の「相州だるま」が入り、現在ではほとんどが平塚のだるまになりました。通常は年の瀬に開かれるだるま市ですが、麻生不動院では例年1月28日に行われるため、「関東納めのだるま市」として親しまれています。このだるま市は、2022(令和4)年12月に川崎市教育委員会から川崎地域文化財に選ばれました。七転八起の法被を着た売り子が、だるまが売れるたび、買手の家内安全商売繁盛を願って火打石で切り火をし、威勢のよい掛け声を掛ける様子は、見るだけでも元気をもらええる風景です。

(絵と文/佐藤勝昭)

からむし第72号の  
ラインナップをご紹介します

### P1 麻生区の風物紹介

麻生の風物詩となっている麻生不動院のだるま市は、このほど川崎市地域文化財の指定を受けました。佐藤勝昭さんが絵と文で不動院とだるま市を紹介しています。

### P2/P3 座談会

「あたらしい風は吹いたか」  
麻生区文化協会が「あたらしい風と創造」を掲げてから9年が経ちました。この間、新しい風は吹いたのでしょうか。今後どうすれば新しい風を吹かせられるかを話し合います。

### P4 「自然環境と生活文化の伝承を —麻生の独自性を開こう—」

麻生区文化協会に長く関わってこれ、総会などでも適切なコメントをくださる書家の笠原秋水先生に、本会のこれからへの提言をいただきました。

### P5 「地域を文化がつくる」 40周年演奏会は感謝を込めて」

麻生フィルハーモニー管弦楽団が、このほど創立40周年を迎えました。創立の経緯や、文化協会との関わりなどを、団長である岩倉宏司さんが熱く語ります。

### P6/P7 麻生区文化協会の行事報告

麻生区文化協会が2022年度後半に行った夏休み親子教室、テッサン会、俳句講座、第38回麻生区文化祭、あさ古風七草粥の会、かわさき市民芸術祭について報告します。

### P8 行事報告続き

文化講演会、アルテリッカ新ゆり美術展について報告します。  
第9回あさお写真会

### 文化協会のこれから

麻生区文化協会が2023年度に行う行事、総会、テッサン会、俳句講座、麻生区文化祭などの日程の予告です。

編集後記

## 座談会

# 「あたらしい風」は吹いたか

2月26日、新百合トウエンティワン

ホール第2会議室にて、座談会「あたらしい風」は吹いたか」を開催しました。ご参加いただいたのは、麻生区文化協会顧問である三瓶清美さん（麻生区長）、齊藤誠さん（麻生市民館長）、佐藤英行さん（麻生区美術家協会会長）、北條秀衛さん（川崎市文化財団顧問）。本会からは、会長の菅原敬子のほか、横川博行、井上俊夫が参加。司会は橋本周、記録は佐藤勝昭が担当しました。

\* \* \*

**司会** 本日はお忙しい中、ご出席いただきましてありがとうございます。麻生区文化協会が30周年事業で「あたらしい風と創造」を掲げて9年。あと1年で40周年という今、顧問の皆様は本会をどうご覧になっているのか、お考えやご意見をお聞かせいただきたく、この座談会を企画しました。会を進めるにあたり、まずはじめに菅原会長から一言お願い

します。

**会長** 2014年に30周年記念誌を作るにあたり、他区の記念誌とはひと味違う、皆様に読んでいただけるような中身のある記念誌を作りたいということで、「あたらしい風と創造」という目標を掲げました。一般市民の目から見ると、このキャッチフレーズの大きな成果はあまりないのではないかと指摘があります。例えば洋舞では、クラシックバレエだけでなく、モダンダンスなど新しいものを取り入れています。まだまだ未達成のジャンルもありますが、「あたらしい風」を吹かせるための提案をいただければ、今後の活動に活かしていきたいと思えます。

**司会** それでは最初に三瓶区長、行政の広い立場からのお考えなどをお聞かせいただけますか。

**三瓶** 先日、麻生中学校の3年生による「麻生区が活気ある住みやすい地域になるためには」というテーマの

学習発表会に呼んでいただきました。麻生区の現状を捉え、課題を見つけて解決策を提案するというもので、芸術文化のまちを挙げた生徒も複数いましたが、ある生徒から「芸術のまちを実感していない。実感していないのに魅力と言えるのか」という意見が出ました。耳の痛い話ではありますが、それは素直な意見だと思います。その生徒からは、写真や動画、絵をSNSで発信し、全国に麻生区をアピールしてはという提案がありました。多くの人を巻き込みたい、関心の薄い人に興味・関心を持ってもらうことが大切ですね。

**司会** 興味・関心を持つてもらいながら何かが始まりそうです。佐藤さん、美術家協会の会長の立場からは、文化協会をどうご覧になっていきますか。

**佐藤(英)** 菅原会長は「風が吹かない」とおっしゃいましたが、私は「立派に風は吹いている」と思います。あえて言わせていただくと、コロナなどいろいろなことが足かせとなって、活動ができていないだけです。この秋からは、美術界でも全てをオープンにするという社会情勢になってきていますから、文化協会の活動も活性化すると思えます。

高齢化の問題ですが、文化協会の既存の部はどれも高齢のメンバーで構成されています。若い人に既存の部に入ってもらっては難しいかもしませんが、例えば「スポーツ文化部」などを設ければ、高齢者と若者の交流の場になると思います。

それともう一つ、一般市民には文化協会の活動の情報が伝わっていないので、市民館の目立つ場所に、文化協会の活動と年間予定を示す掲示板を作ってほしいと思います。

**司会** 市民館には、文化協会の事務局を置かせていただき、いつもお世話になっております。齊藤館長は、子どもの活動を身近にお感じではないでしょうか。

**齊藤** 昔は町内会や子ども会の活動がしっかりしていて、私はそのような環境で育ってきました。今はそういう地域活動が減っているようですが、それに似た文化協会の親子教室には、たくさんの参加がありました。また、区制40周年記念の子どもの絵の展示を岡上分館で行った時も、親子の参加がありました。このような、子どもを通じて親を巻き込む仕掛けづくりが大事なのではないでしょうか。

**司会** なるほど、昔の町内会や子ども

も会の活動のように、子どもだけでなく親をも巻き込む仕掛けづくりは、一つの突破口になりそうです。さて、長らく地域の芸術文化に尽力されている文化財団顧問の北條さんより一言お願いします。

**北條** 高齢化問題と言われますが、最近の活動年齢は以前に比べて10歳若返っているように思います。90歳を超えた多くの老人が活躍しています。世の中の「あたらしい風」まで引き受けることは難しいでしょう。これから、社会そのものがマイナンバーカードで変わっていきます。若い人は普通にタブレットを使っています。焦点を絞りがながら、次の世代の文化活動を待つのが良いのではないのでしょうか。生活の中の文化や新しい文化が生まれてくるでしょう。私たちはむしろ、高齢者の囲い込みを目指すべきではないのでしょうか。「あたらしい風」を吹かせるために、あえて「古い風」が頑張るといのが私の提案です。

**司会** そうですね。私も常々、生活の中の文化を目指してきました。地域の自治活動に関わってこられた井上さん、ご意見をお願いします。

**井上** 伝統的な芸術文化や生活の中の文化、IT文化から見ますと、



すでに次の世代には絵の具ではなくタブレットの中でしか絵が描けない子がいるように、生活スタイルが変化しています。「あたらしい風」のためには、文化協会の中にプロジェクトを立ち上げて、プランづくりを手掛けていく必要があるでしょう。検討すべきは、会員の高齢化、組織構成団体のあり方、今までの文化とIT教育の関係、市民館との関係などです。また、社会との関係では、アプリする場、例えば、ツイッターやウェブサイトを運営するための人も設備も必要です。

**司会** 社会教育に詳しく、現在アカデミー部で俳句に関わっている横川さんのご意見をいただけますか。

**横川** 私は地域の俳句活動に関わっています。世の中にはたくさんの方々がいて、インターネットの世界では横に広がっていきます。ウェブサイトに俳句を載せている人と、ローカルでやっている人との間にはギャップが生まれています。文化協会の俳句講座俳句大会も、どうすればいろいろな階層にアプローチできるかが課題です。行事もやりつばなしにするのではなく、反省して次にどう活かすかを考えなければなりませんね。

**司会** 多岐にわたりにご示唆をいただき、ありがとうございます。最後にもう一言ずつお願いします。

**三瓶** 川崎市第3期実行計画では、麻生区の人口のピークは2030年の18万7千人となっていますが、先日の国の発表では少子化が予想以上のスピードで進んでいるとのこと、区としても注視していきたいと思っています。

そうした中、重要になってくるのが、いかに選ばれるまちになるかということだと思います。芸術文化は大きな魅力であり、それらをどのように打ち出していけるかが課題だと感

じています。麻生区には、「麻生不動院 だるま市」や千代ヶ丘小学校の「五色八重咲散椿」などを含む、30件の地域文化財があり、区民自身が守り育ててきたこの財産を、次世代に伝えていくことも大切だと感じています。世代や団体の垣根を越えた議論を通して、持続可能なまちづくりを進めていく必要があります。

**北條** 黒川駅前に「劇団民藝」「読売日本交響楽団」「日本オペラ振興会」という3つの実演芸術団体の稽古場が集結しました。東京を出たい、川崎にきたいという団体がほかにもあり、芸術のまちが生まれそうです。「川崎・しんゆり芸術祭(アルテリッカしんゆり)」のアンケートでも、回答者の4割が麻生区外の方です。今後、民藝や読響も交流の仕方を幅広く検討してほしい。文化協会が発表の場になるなど、「声を掛けるといろいろなことができる」ということになれば、活動が広がると思います。区内にある大学も巻き込んでいくことが重要でしょう。

**佐藤(英)** 美術家協会は、春の「アルテリッカ新ゆり美術展」、秋のあさお区民まつり協賛美術展に関わっています。自分たちの作品を出せばおしまい」という会員が多いのも

事実です。1月の「あさお古風七草粥の会」のように、会員全員が参加するイベントが秋にもあると良いと思います。

川崎市では「全国都市緑化かわさきフェア」の開催を予定していますので、これを盛り上げていくのも良い機会でしょう。

**横川** 川崎市アートセンターから俳句と他のイベントの連携の打診があり、麻生観光協会からは菊花展と俳句大会のコラボの打診がありました。が、時期的な問題があつてまだ実現していません。今後、菊花展に投票箱を置くことなどを検討したいと思っています。

**三瓶** 菊花展を市民館でやるのではなく、商業施設を使うことによつて、多くの方に興味を持っていただくことも検討課題です。

**司会** そうですね。内から外へ出ることも大事な時代です。

**井上** 私は寺子屋の運営に関わっていて、会員の方に琴の指導をしていたのですが、技だけでなく、所作も学びました。俳句なども連携していきたい。次の世代にどうつなげるかが大事です。

**司会** さて、記録の佐藤さん、感想などいかがですか。

**佐藤(勝)** 文化協会の情報発信の場として、現在は私がボランティアとして、個人的にウェブサイトを運営していますが、今後はオフィシャルなサイトを運営できるように環境を整えていただき、区のサイトからもリンクできるようにしてほしいです。

また、私は先日開催された「カフェ・グランデあさお」にも関わっています。が、そこでは「ふらつと新百合ヶ丘」「子どもしんぶん部」などの若いメンバーが熱心に活動しています。文化協会もこういう若いグループと連携ができれば良いと思います。

**司会** 皆様、ご意見ありがとうございます。最後に会長よりご挨拶をお願いします。

**菅原** 本日はお集まりいただき、それぞれのお立場から、こう考えれば良いのではというご提案をいただきました。共に活動する中で、若い人だけでなく、高齢者の知識も活かしながら、40周年に向けてもう少し検討していきたいと思っています。あと1年間の任期中は、今のメンバーで尽力してまいりますので、ご支援よろしくお願いたします。

# 自然環境と生活文化の伝承を —麻生の独自性を開こう—

笠原 登(号・秋水)

## ◆自然環境が生活の場

創設以来、麻生区文化協会には人一倍強い愛着を持って参加してきた。この地に育った地元人間としては当然である。

1960(昭和35)年、人家のない山地に地元有志の力で百合ヶ丘駅がオープン。すると、周辺の宅地化が急速に進んだ。それまでは生田・高石・細山・柿生による多摩区であり、農業地帯であった。

1982(昭和57)年の分区分で旧生田村は東西に分割され、長沢の一部を入れて麻生区が誕生した。

私の子ども時代、今の麻生は山の中にあった。どこまでも雑木林が続く山里で、生活は散在する農家中心の村落共同体の風俗習慣で支えられていた。

山林と田畑が消えて新都市化した麻生区で暮らしていると、当時の生活体験の郷愁が湧き出てくる。

春Ⅱ谷戸田の畦道でセリ採りをして、ゴマ和えやおひたしで味わった。ワラビ、ヨモギ、ノブキ、サンショウなども常食にした。

夏Ⅱカブトムシとクワガタが王者。

夕暮れから家の前のクスギ林に入ると50匹ほど捕った。翌朝教室へ持ち込み、学級の子どもに1匹ずつ配った。

町つ子の3年生が大歓声を上げた。もう60年も前のことだが思い出すことしばしば。夜の谷戸田は蛍の乱舞。無数の点滅する曲線の光は夏の風物詩だった。高浜虚子の句「螢火の今宵の闇の美しき」がびたり。

8月は旧盆。親類が集まり、墓参りをして、本家の座敷で自家製の料理を食べあつてご先祖様の供養をした。盆の間はどこの家も農作業は休止した。

この時期、ヤマユリの花が満開になる。高石柿生・横浜港北の分岐点だった巨木の弘法松周辺は、見渡す限り山と谷で人家がない。このあたりがヤマユリの産地だった。我が家でも1本に10個も花をつけるヤマユリが、庭いっぱい咲き誇った。

秋Ⅱ七草が林の中や土手で開花した。春の七草はもっぱら食用で、秋の七草は花を見る楽しさ。私宅の庭では今も7種全てが咲く。私は毎秋その花々の風趣を眺めて心を満たしている。好きな花は紅白の萩、キキョウの

青、オミナエシの黄色だ。フジバカマは珍しいねと言われる。

陽当たりの良い土手や山道などに、光に敏感な野生のリンドウが咲き出すと晩秋になる。

部落ごとに神社で囃子、太鼓、神輿のお祭りが賑やかであった。

稲の脱穀が済むと、わら打ちをして細い縄を編み、むしろに座り足に縄をかけてわら草履作りをした。私は小学4年で初めて自作の草履を履いて遊んだ。学校の上履きとしても愛用した。

冬Ⅱ正月の子どもも主体のセイノカミ(歳の神)を田んぼに作り、7日間小屋遊びをした。14日目朝の点火で最高潮。当時を再現した私の実話を近刊『教師の短話集・言葉の貯金箱』に写真入りで記してある(麻生図書館に寄贈済み)。

この他、麻生ならではの風習や生活文化の例は数え切れない。禅寺丸柿、高石神社の流鏑馬、だるま市の今昔、農民俳句会等々も記したかった。

今年19回目を迎えた行事「あさお古風七草粥の会」については、私見を述べておきたい。

文化協会の委員中心で行われていた細山史料館での七草粥の会で、私は当時の杉本会長に直言した。

「この七草粥は生田村・柿生村特有の伝統食、いわば郷土の生活文化です。ぜひ市民館広場でやってください」と。

すると会長は「それはいい発案だね」とおっしゃってすぐ役所と交渉され、翌年に即実現!そして現在に至る。

外で火を焚く大鍋料理作りだけは許可されず、つだけ私の願いが叶わなかった。市の補助金も出て、係の人たちの奉仕力のおかげで、今や千人が集う盛会になった。麻生区文化協会の独自のシンボルとして長続きしてほしい。

## ◆私の提言

麻生の今昔を語れる生き字引の人がいなくなってきたので、

①ふるさと麻生を語り聞かせる「自然と共生の生活文化講座」を、月1回ペースでシリーズ化する。

②ふるさと麻生を伝承する資料室を市民館の一室か室外に新設して、区民の見学の場とする。

右の2点が新しい麻生の生活文化創造の基盤になると思う。



3月5日、麻生区役所 中庭お花見会にて

## ◆四季の風物詩

雑木林は昆虫・野鳥・野生の花木の実などの宝庫であった。

# 「地域を文化がつくる」

## 40周年演奏会は感謝を込めて

### 麻生フィルハーモニー管弦楽団 団長

### 岩倉 宏司



上/「マイタウンらぶりいあさお」1983年3月号「団員募集記事」  
下/「1986年5月」第1回麻生音楽祭

「マイタウンらぶりいあさお」1983年3月号「団員募集記事」  
下/「1986年5月」第1回麻生音楽祭

意義のあること  
だったと思いま  
す」と書いてい  
る。麻生区・新  
百合ヶ丘のまち  
づくりが文化  
芸術とともに語  
られる由縁だ。

長い歴史をつなぐ大きな要因である。

2023年5月にミューザ川崎シンフォニーホールで開催する「芸術文化のまち麻生」を創り上げていった方への感謝の思いを込めた演奏会としたいし、さらに地域に貢献できる麻生フィルでありたいと考えている。

多摩区から麻生区の分区の準備が進んでいた70年代後半から、新しいまちづくりに向けた議論が始まった。多くの人が結集したのは麻生市民館の建設に向けての活動だった。1985(昭和60)年4月、麻生市民館が完成。今年40周年を迎えた麻生フィルハーモニー管弦楽団の始まりは、「麻生市民館という器を作るだけでなく、魂を入れよう。麻生市民館のこけら落としに区民の力でペーローベンの『第九』を。歓喜の歌で歓びを表そう」。そんな想いの中からだ。

麻生市民館完成に合わせて発行された『多麻に萌える』(川崎北部に近代的市民館建設のための署名運動委員会編)で、藤田親昌麻生区文化協会初代会長は「地域と文化」という文を寄せて、大阪大学の山崎正和さんの『地域文化史の三段階』から、「第1段階は『地域が文化をつくる』段階。次は『文化で地域をつくる』。これに対して、現在は『地域を文化がつくる』時代に入り、これまでは逆に地域社会のまとまりや反映がむしろ文化活動によって支えられている」と書いている。また、西村俊行初代麻生区長は「この運動の口火を切った方々を見ると、従来は市政にあまり積極的な関わりを持たなかった地区在住の文化人の方々であったことです。このことは地区の文化推進にとつて大変

は彼の発意と行動とに実に多くを負っていると思います」と書いている。初代麻生フィル団長にもなる大久保さんは、川崎青葉幼稚園の井上準之助園長に、麻生フィルの練習場として使わせてほしいと掛け合い、井上園長も地域と共に育つ幼稚園だからと快く応じてくださった。アマチュアオーケストラにとつて、最も課題となるのが練習場の確保だが、これに困ることがなかったことは、麻生フィルが

創設準備は、多くの音楽関係者の支えにより進んでいくが、なかでも野口力さん(読売交響楽団打楽器奏者)には、演奏面での指導だけでなく、「麻生フィルは常任指揮者を置かず、たくさんの指揮者からたくさんのことを学んで成長するオケでありなさい」と、アマチュアオーケストラの運営についても多くの示唆をいただいた。最初の10年に、河内良智さん、今村能さん、三石精さん、山下一史さん、大野和士さんなど、当時気鋭で、今は世界的に活躍する指揮者に指導していただくことができたのも、野口さんの尽力があったからできたことだ。

1985年7月、三石精さんの指揮で、創設の目的だった麻生市民館のこけら落とし公演「第九フェスティバル」では、同じくこの日のために作られた「麻生第九を歌う会」(のちの麻生合唱団)と共に、無事に演奏を披露することができた。10月には第1回麻生文化祭参加。ドヴォルザークの「スラブ舞曲8番」と「交響曲第8番」を演奏した。

### ◆多くに人の力と夢で誕生した麻生区民のオーケストラ

### ◆麻生市民館のこけら落としに第九フェスティバルを

文中に登場するほとんどが麻生区文化協会の立ち上げを支え人たちで、皆さんは各方面で麻生区の文化活動とそのネットワークを生み出した。

# 麻生区文化協会の行事報告

## 夏休み親子教室

今回もコロナ禍中ではありましたが、感染防止対策を講じて、7月23日から8月18日までの間、恒例の「夏休み親子教室」を開催しました。

学校などでは体験できない10教室に参加した100人を超える子どもたちは、一生懸命に取り組んでいました。

これまでの伝統・伝承文化を学ぶ教室に加え、新たにパソコンを使った「プログラミング教室」も行いました。夏休み中数回のフォローをリモートで行いましたが、子どもたちは完成した自分のプログラムに満足していました。



川見川教室  
(7月24日実施)



日舞教室  
(8月2日実施)

(井上俊夫)

## デッサン会

9月10日、麻生市民館第会議室において、劇団民藝の女優、小嶋佳代子さん、金井由紀さんのお二人をモデルに、デッサン会を開催しました。



コロナ対策のため、参加人数を25人に限定。参加者の皆さんは真剣なまなざしで描いていました。

(小田島寛)

## 俳句講座

9月13日、麻生市民館大会議室にて講師に山田貴世さん(「波」主宰、現代俳句協会理事)をお迎えして開催。46人が出席しました。演題は「俳句の力」。心を強くすれば身体も丈夫になる。座の文学である俳句は人生の生きがいにつながる。俳句は生きる証の歌。高齢化社会、俳句の力を信じ取り組んでいきましょうとお話いただきました。

(横川はつこ)

## 第38回

### 麻生区文化祭

#### ◆邦舞邦楽

10月22日午後、麻生市民館ホールにて8団体と個人14人、合計60人が出演し、第1部25演目、第2部7演目を披露しました。時間通りの進行ができ、踊りも良かったとの感想をいただきました。感染防止対策としては、ドアの開閉を演目ごとに行いました。残念だったのは、終演の緞帳が下りなかったこと。観客数は150人でした。

(中島邦子)

#### ◆俳句大会

10月22日、大会議室にて「第34回麻生区俳句大会」を感染対策を講じて開催しました。応募者数は128人、応募句数は468句と前年とほぼ同様の応募状況でした。

第1部の式典では入賞者表彰、優秀句には記念品授与がありました。今年区制40周年の記念大会として特設された記念賞は、池内英夫さんに授与されました。

第2部においては、3年ぶりに席題句会が行われ、句会の醍醐味と、コロナからの回復の一步を実感できました。

#### 【入賞者紹介】

- 区制40周年記念賞 池内英夫  
ヨットゆく波に付箋を貼るごとし
- 川崎市長賞 川田 潔  
我が影を地面に焦がす曇さかな
- 川崎市議会議長賞 花輪 佳子  
逆あがり児の蹴り上げる大夕焼
- 川崎市教育委員会賞 谷文香  
詩のかけら降るかに星の流るる夜
- 麻生区長賞 馬場 身江子  
虹二重佳きことのみを記す日記
- 麻生市民館長賞 三浦 貴美子  
杖つくも背筋気にする敬老日
- 川崎市総合文化団体連絡会理事長賞 斉藤まきと  
かたつむり雨脚白き山の雨
- 川崎市観光協会会長賞 富山ゆたか  
先頭はスキップする子花野道
- 麻生観光協会会長賞 朝岡 芙貴代  
百灯の一灯めざす秋の暮
- 麻生区文化協会会長賞 早川 靖子  
落日の谷戸の炎や柿紅葉



俳句大会 会場

(横川はつこ)

#### ◆麻生フィルハーモニー管弦楽団

10月23日午後、ホールにて田中健氏を指揮者にお迎えして、第75回定期演奏会を開催。チャイコフスキー作曲「幻想序曲「ロメオとジュリエット」、ラフマニフ作曲「交響曲第2番小短調作品27」を演奏しました。入場者数は459人、演奏者は83人。コロナ感染防止対策として、練習参加者の健康管理(検温・体調管理)、換気を徹底しました。当日は指定席制度を採用し、開場前の入場者密集を回避。また、演奏会後の打ち上げは、舞台上での挨拶のみとしました。観客からは「演奏がとてもよかった」という感想が多く、中には「交響曲の3楽章を聴いていて感動で涙が出た」という声も。楽団の運営側からは、コロナ禍で自粛する傾向があったが、もう少し広報を行ってもよかったのではとの反省が報告されました。

(横須賀朝子)

#### ◆吟舞吟詠

10月23日午後、大会議室で(公社)日本詩吟学院岳窓会、(公社)日本詩吟学院聖吟会、(公社)日本詩吟学院嶺風会、(公社)日本吟道学院緑神会により詩吟41番、吟舞3番、舞踊2番の計46番が演じられました。感染防止対策として、椅子の間隔をあけ、マイクは1人が吟詠する毎に消毒しました。

(正岡峻)

◆美術工芸展

区制40周年記念に合わせ、10月27日～11月2日、麻生市民ギャラリーにて開催しました。絵画、書、写真、手工芸、彫刻、絵手紙、生け花の32人が出品しました。6日間の全日程が秋晴れの好天に恵まれ、643人の参観者がありました。書と写真に2人の新加入もあり、最終日には出品者がそろって記念撮影をしました。

3階のウォールギャラリーでは、秋水道会の方の皆さんの作品も同日程で展示されました。



美術工芸展出品者がそろって記念撮影

(小田島寛)

◆洋舞

洋舞くるーぶ公演は、11月6日に開催しました。区制40周年記念として、しんゆり芸術のまちづくりの後援を受け、区のイメージソング「かがやいて麻生」に新たに振り付けをし、子どもたち32人が冒頭で踊り、注目を集めました。また、今回は大勢の観客にご来場いただくことができ、感謝です。プログラムも8団体の特徴が生かされ、楽しく見ごたえのある作品が並びました。洋舞は今年度から文化祭を実施委員会形式にし、委員長の大西まり子・副(芳賀優子)両名を中心に準備を進め、全員で仕事を分担、便利な「EPOグループ」による伝達に助けられ、次回への引き継ぎを念頭に、実り多い実施結果となりました。ご多忙中、三瓶区長をはじめ御臨席くださいました皆様には厚く御礼申し上げます。



「かがやいて麻生」を踊る子どもたち

(伊藤胡桃)

あさお古風七草粥の会  
3年ぶりに通常開催

「あさお古風七草粥の会」は、麻生区の正月の風物詩として市民に期待されているイベントです。2020(令和2)年度は、コロナ禍のため粥の提供は中止し、パネルと動画による展示のみ行いました。2021(令和3)年度は、食数を例年の半分の500食とし、整理券方式で喫食する人の制限をすることもに、食卓の椅子は片側のみにするなど、十分な感染症対策を施し、実施しました。

そして今年、2022(令和4)年度の七草粥の会では、これまでの経験を生かし、従来通り1000食(うち200食は市民の要望を受けてテイクアウト)を提供しました。晴天に恵まれ、会場には10時過ぎから整理券を求める長い行列ができました。開会宣言と同時に受付を開始し、整理券の確認を経て粥の提供となり、会場が気にお正月気分になりました。今回は、白鳥神社の片平はやし連によるお囃子と獅子舞が復活し、童謡をうたう会による正月遊びや、かわさきカルタとりなど、市民参加型の出し物もあり、終始和やかな雰囲気でした。



片平はやし連によるお囃子

(橋本周)



あさお古風七草粥の会 会場



七草摘み

かわさき市民芸術祭

◆美術部門

川崎市総合文化団体連絡会主催、川崎市川崎市教育委員会共催「第39回かわさき市民芸術祭」の美術部門展が、2月7日～12日の6日間、川崎駅北口直結のアートガーデンかわさきで開催されました。期間中、絵画36点、写真15点、手工芸・フラワーデザイン25点、書21点、詩歌19点が展示され、華道は前期と後期にそれぞれ7点ずつ展示されました。麻生区は絵画5点、写真5点、手工芸彫刻5点、書4点を出品しました。最終日には福田市長も来訪され、熱心にご覧いただきました。期間中の参観者は1100人でした。



出品者の話に耳を傾ける  
福田市長

(佐藤勝昭)

◆舞台部門

3月5日、第39回かわさき市民芸術祭の舞台部門(邦楽邦舞)がカルッツかわさきにて開催されました。各文化協会により8演目の上演があり、麻生区文化協会は「長唄大和楽」を上演。沢村一寿、若柳雅亀路、西川扇栄次が出演し、重厚な舞台を披露しました。

(伊藤胡桃)

## 区制40周年記念

### 文化講演会

「小田急線の昔・今・未来」  
原武史 放送大学教授

3月4日、麻生市民館大会議室にて文化サロン主催文化講演会を開催しました。今年度は昨年度のプレに続き、麻生区制40周年記念事業として行いました。前回は予想以上に参加者が増え会場が混乱したため、今年は事前予約制を取り、コロナ対策を講じました。

昨年は日本の鉄道開業150周年、および麻生区内を走る小田急小田原線の開業95年にあたることから、区民の足として親しまれている小田急線のこれまでとこれからをテーマにしました。講師は、日本政治思想史が専門でありながら鉄道に造詣が深く、「鉄学者」の異名をとる原武史放送大学教授。小田急電鉄株式会社の後援をいただき、開演前に小田急線のPR動画を流しました。当日は、約120人の参



加者がありました。

原先生は、主に首都圏近郊の団地、それを結ぶ鉄道、また近代の天皇制について多数の著書があり、また朝日新聞の土曜版に毎週「歴史のタイムグラム」という連載を書かれていることから、原先生のファンを自称される方々も多かったです。原先生は、冒頭「小田急電鉄の社史のような話はしません。鉄道愛好家、政治学者から見た話をします」と話され、専門の歴史や政治、また他の私鉄などの多彩なエピソードを交え、小田急線の多岐にわたる話を披露されました。アンケート結果を見ても、参加者が初めて聞く話も多く、またユニークな視点での意見があつと驚かされる場面もあり、講演後の質疑でも多くの意見や質問が寄せられ、その気さくで大胆な発言がとても興味深かったという意見が多く寄せられました。

(板橋洋)

## アルテリツカ 新ゆり美術展

3月6日～12日、新百合トウエンティワンホールにて開催しました。この美術展は、麻生区美術家協会、麻生区文化協会、川崎市文化財団が合同で主催し、今年で15回目を迎えました。美術家協会は絵画・工芸彫刻の大作19点を展示、文化協会は絵画6点、書6点、工芸彫

刻6点、写真14点、いけば花7流派合作1

点、および、民藝の女優さんを描くデッサン会参加者作品15点を展示し、来場者を魅了しました。また川崎ジュニア文化賞を受賞した小学6年生の作品7点と、川崎市立栗木台小学校の創立40周年記念大漁旗が



特別展示され、好評でした。天候に恵まれ、期間中1602人の入場者がありました。

(佐藤勝昭)

## 会員の活躍

### 第9回 あさお写遊会

あさお写遊会は、年最初の1月第一週に麻生市民ギャラリーで開催してきた風景中心の写真展です。その準備は暑い7月の会場予約抽選会からスタートします。寒い1月に会場を確保するのは、「あさお古風七草粥の会」と日程が



重なり、来場者が多くなることを期待するからです。今年には会期中に400人を超える方々にご来場いただき

ました。来年は第10回を迎えます。現在8人のメンバーですが、10年の節目を記念に写真集を作ろうかという話も出ています。実現できることを期待しながら、来年の開催に向けて各自が写真の腕を磨いています。

(小田島紀美)

## 文化協会のこれから

### 2023年度 総会

4月29日(土) 13時  
麻生区役所 第一会議室

### 舞台衣装の女優さんを描くデッサン会

7月15日(土) 麻生市民館大会議室

### 俳句講座

9月12日(火) 麻生市民館大会議室

### 麻生区文化祭

10月21日(土) 「邦舞邦楽」ホール、  
「俳句大会」大会議室

10月22日(日) 「麻生フィル」ホール、  
「吟舞吟詠」大会議室

10月27日(金)～11月1日(水) 「美術  
工芸展」市民ギャラリー、ウオー  
ルギャラリー

11月5日(日) 「洋舞」ホール

### 《2024年》

### あさお古風七草粥の会

1月7日(日) 麻生区役所前広場

### 文化講演会

3月2日(土) 大会議室

### アルテリツカ新ゆり美術展2024

3月4日(月)～10日(日)

新百合トウエンティワンホール

## 編集後記

社会全体が動き出し、さまざまな催事が行われようとしています。特に野球のWBCが「一気に活気を呼び戻す勢いですが、油断は大敵。用心深い人々は、なかなかマスクを手放さないのでは。さて、今号では座談会「新しい風」は吹いたか」を開き、それぞれのお立場からご意見をいただきました。また、笠原秋水先生には寄稿をお願いし、麻生の生活の中の文化史のお話や斬新な提言をいただきました。(橋本周)

《会員の訃報 謹んでお悔やみ申し上げます》  
本玉 秀夫(2022年8月)  
加宮 由登(2022年11月)  
山本 詢子(2023年2月)

【編集委員】  
井上 俊夫、岩田 輝夫、小田島 紀美、  
小田島 寛(写真)、佐藤 勝昭、  
関森 田鶴子、橋本 周、横須賀 朝子

麻生区文化協会会報  
からむし 第72号  
2023(令和5)年3月31日発行  
発行人/麻生区文化協会  
会長 菅原 敬子

編集/麻生区文化協会  
からむし編集委員会  
川崎市麻生区万福寺1-5-2  
麻生文化センター内  
044-951-1300  
印刷/株エリアブレイン